



松岡光治編，
『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化—生誕百五十年記念』
Mitsuharu MATSUOKA, ed., *Society and Culture in the Late Victorian Age with Special Reference to Gissing*
(xiii + 540 頁，溪水社，2007 年 11 月，
本体価格 8,000 円)

ISBN: 4874409830

(評) 永岡規伊子
Kiiko NAGAOKA

本書は、ギッシングの生誕 150 年を記念して企画されたもので、同じ編者による前書『ギッシングの世界 — 全体像の解明をめざして (没後 100 年記念)』(英宝社，2003 年 12 月) に続くものである。松岡光治氏の編集によってギッシングの生きた時代が、その生涯と作品を通して幅広い視点から論じられている。

本書は 25 のテーマ (以下に下線で記す) を 5 部に分けて構成されており、内容は次のとおりである。

まず、序章のピエール・クスティヤス氏 (『ギッシング・ジャーナル』編集長) による「ギッシング小伝」(松岡光治訳) は、本文の半分の長さの詳細な訳注が付された全体の見取り図となる章で、ギッシングの人となり余すところなく伝えている。

第一部【社会】では、小池滋氏が「教育— そのタテ前と本音」で、教育を立身出世の手段とする当時の人々の考え方を概観した上で、ギッシングの前期作品を彼流のビルドゥングスロマンとして読み解く。富山太佳夫氏は、世紀末小説に表された貧困と遺産相続の内実の変化を取り上げ、その中でギッシングに特徴的にみられる「登場人物を予想外の方向に不安定に動かし続ける執拗な技法」とそれによってテキストに生じる作者の意図の決定不可能性を論じた上で、「宗教— なぜ書かなかったのか」を明らかにする。新井潤美氏は「階級— 新しい「ミドル・クラス」」において、ギッシングが教育を受け上昇の機会を与えられながらも、出身階級にも上の階級にも居場所がない不条理を生きた 19 世紀後半の下層中流階級の作家であり、『ヘンリー・ライトクラフトの私記』において「無階級」の理想的な第二の自我を書こうと試みたのではないかと結論づけている。石塚裕子氏は 19 世紀の「貧困— 貧民とその救済」の問題を取り上げ、慈善活動や社会主義運動とは距離を置いたギッシングの在りようを論

じる。松岡光治氏「都市—自分のいない場所がパラダイス」では、19世紀前半の都市化と後半の都会からの脱出の時期を経た、ヴィクトリア朝末期に顕著になる都市と郊外および田舎の同一化という現象をギッシングの小説から読み取り、都市と郊外および田舎に対するギッシングの両価感情を照射する。

第二部【時代】村山敏勝氏の「科学—進化に背いて」では、作品に表れたギッシングの科学への不信を通じて、19世紀末の科学、特に進化論と遺伝学の「幾重にも錯綜した言説」を明らかにし、「伝統的な宗教にも、科学の宗教にも、幻想を抱けなかったギッシング」を浮き彫りにする。急逝された偉才の研究者である村山氏の本論考は難解なテーマを平易な文章と明晰な論理で書かれた説得力のあるものとなっている。玉井史絵氏「犯罪—越境する犯罪と暴力」では、後期ヴィクトリア朝に流布した犯罪学のコンテキストの中でギッシングの初期から後期への作品の変容を辿り、犯罪と暴力が階級と国境を越えてイギリスの文明に潜んでいるという認識に至る道筋を論じている。ヴィクトリア朝の出版事情に詳しいグレアム・ロー氏は、「出版—ギッシングと定期刊行物」（野々村咲子訳）の中で、後期ヴィクトリア朝の変貌する文学市場と出版メディアに対してギッシングが抱いていた両価感情を解き明かす。金山亮太氏「影響—白鳥は悲しからずや」では、ディケンズ・カーライル・メレディスからの影響とそれぞれの作家との相似・相違点を論じ、特に階級的アイデンティティを失うことがなかったディケンズに対して、ギッシングには自らの立ち位置の揺らぎがあり、それが両者の人物描写において「対象に対する距離の取り方」の違いを生んでいると分析する。石田美恵子氏「イングリッシュネス—「南」へのノスタルジアの諸相」では、ギッシングの両義的なイングリッシュネスという視点から、地中海世界と南イングランドに対する彼の憧れを解説している。

第三部【ジェンダー】太田良子氏「フェミニズム—ギッシングと「新しい女」の連鎖」は、社会の矛盾や変化を示す記号である「新しい女」というコンテキストで、ギッシングの小説を読む試みである。中田元子氏「セクシュアリティ—「性のアナーキー」の時代に」では、後期ヴィクトリア朝におけるセクシュアリティをめぐる言説を概観し、「相反する欲望に引き裂かれたギッシングのセクシュアリティ観」を論じている。武田美保子氏「身体—「退化」としての世紀末身体」では、ギッシングの身体意識を医科学言説とジェンダーの境界侵犯の問題との関わりの中で論じている。木村晶子氏「結婚—結婚という矛盾に満ちた関係」では、俗化する世間と道德性の喪失に対する批判的視線を持つがゆえに、ギッシングが旧来の結婚制度と女性の役割のゆらぎを描きながらも、女性主導の家族関係に否定的であったことを明らかにする。田中孝信氏は、「女性嫌悪—男たちの戸惑いと抗い」において、フェミニストの主張に対する

ギッシングの立場の曖昧さを作品から考察し、それが「19世紀末の変容するジェンダー観の渦」の中で戸惑い、葛藤する男性の反映であることを論じている。

第四部【作家】新野緑氏は、「自己—「書く」自己／「読む」自己」において、ギッシングの作家としてのアイデンティティや創作の行為そのものに注目し、「書くこと」と「読むこと」に見出される「自己」の本質を明らかにしていく。小宮彩加氏「流謫—失われたホームを求めて」では、「生まれながらのエグザイル」で「死ぬ時もエグザイルだった」ギッシング自身と彼の作中人物が持つ重層的な疎外感と孤独感に、後期ヴィクトリア朝社会の特徴を読み取っている。バウア・ポストマス氏は、「紀行—エグザイルの帰郷」（光沢隆訳）において、追放者の運命を克服する最後の試みとしての、ギッシングの憧れの故郷であるローマへの「帰郷」の意味を辿り、その紀行文『イオニア海のほとり』を「過去百年に現れた紀行文の中でもっとも優れた一つ」となさしめている古典文学との関わりについて論じている。廣野由美子氏は「小説技法—語りの方法と人物造型」において、作品自体よりも人物としての作家に対する関心の高さに埋もれて、これまで評価が十分でなかったギッシングの芸術家としての側面を再評価し、彼の小説が持つ「伝統と実験、イギリス的なものと非イギリス的なものとが、ない交ぜになったような様相」について論じている。宮丸裕二氏は「自伝的要素—分裂する書く自分と書かれる自分」において、19世紀半ばに発展した自伝的小説の系譜を概観し、世紀末作家であるギッシングの作品がその内容と形式において、読者のための文学から書く側のための文学へと移行していること、そしてその点において20世紀作家への橋渡しとなっていることを明らかにする。

第五部【思想】梶山秀雄氏「リアリズム—自然主義であることの不自然さ」では、ギッシングが社会主義リアリズムから自然主義リアリズムへ、そして「合わせ鏡のように「観察する自己」について内省を深めていく」過程を辿り、『私記』において「現実を模倣する行為の模倣」というミメシスの形でリアリズムに回帰したと論じている。ジェイコブ・コールグ氏「ヒューマニズム—時代からの亡命」（矢次綾訳）では、時代特有の信条に一時は共通点を見出しながらも、当時の一般的な思潮を退けたギッシングの生き方を概観し、荒廃した時代の証言者として観察するままに書き記した表現が「不幸な人物の苦しみではなく、作者自身のもっと深い痛み」であることに彼のヒューマニズムを読み取っている。吉田朱美氏「審美主義—美を通じた理想の追求」では、ギッシングの初期・中期の作品において、芸術家や芸術作品が道徳的な機能を果たす「美の宗教」として描かれているのに対し、後期には倫理規範から逸脱した存在という芸術

家観が語られるようになっていく過程を辿り、同時代の画家、批評家、作家の影響関係を論じている。並木幸充氏「古典主義—ある古典主義者の肖像」では、ギッシングの古典嗜好が注入された作中人物と古典を題材にした作品に、古典主義者としてのギッシングの姿を明らかにしている。そして、編者が「まえがき」において「本書を出版する最大の意義を高らかに謳っている」と述べているのが、ピエール・クスティヤス氏の最終章「平和主義—その気質の歴史的考察」（田村真奈美訳）である。クスティヤス氏はその章において、「平和を愛し、平和を人類の貴重な財産と考えていた」父親から影響を受けたギッシングの、作品や手紙に表された反帝国主義、反軍国主義、人間主義、人道主義と結びついた平和主義を論じている。そして本書の最後に武井暁子氏による1857年から1905年までの「ギッシング関連、政治・経済、社会・文化、文学・思想」の項目に分けられた詳細な年表がつけられている。

どの論文もとても読み応えがあり、多くの示唆が与えられた。オーソドックスな視点であるが、海外の主要な研究者であるジェイコブ・コールグ氏がヒューマニズムの問題を取り上げ、クスティヤス氏が平和主義の問題を取り上げていることが印象的であった。これは専門の人にとっては常識なのかもしれないが、評者にとってはこれまでもっていたギッシングのイメージと異なる面が浮かび上がってくるように感じられた。

全体を読んでみて、ギッシングの中にある屈折した思いやアンビヴァレントな感情、それを乗り越えようとするエネルギーが、時代の中で書くという行為によって一つの世界を作り上げていったこと、そこに時代によって変わってゆくものと変わらないものがあることを感じた。ギッシングの面白さは、そうした個の視点と社会の視点があつかり合いながら、多面的な世界を描いているところにあり、本書の内容は、その意味で、ギッシング研究にとってとりわけ重要な意味をもつものであろう。また、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのイギリス、ヨーロッパ社会と文学とのかかわりを考える上で、本書はギッシングに対する関心の有無にかかわらず読む価値のある文献になっていると言えるだろう。

本書は、執筆者がギッシング研究の世界と日本のリーダー、日本の中心的な研究者、精鋭の若手研究者であり、その最大の特徴は人物と作品を通して見るヴィクトリア朝後期の全体像が明らかにされているだけでなく、それぞれの問題意識や研究方法も学ぶことができる点にある。そして、編者の長年の研究の蓄積にもとづく確かな視点によって、本書は社会と文化の主要なキーワードとなるテーマに分類してパズルのように緊密に構成されており、国内外の広い交流によってテーマにふさわしい研究者が執筆した大著となっている。またギッ

シングの人物と文学世界を通して、時代の社会と文化がいろいろな角度から示されると同時に、ギッシングの全体像が、その生の基盤にある社会と文化とつながりながら鮮やかに浮かび上がってくる。読者を引き込んでゆく編集の緻密な意図があり、読んでいて楽しい時間を味わった。

本書は、前書と合わせてギッシング研究のもっとも重要な基本文献として今後長く活用されるものであり、日本におけるギッシングの再評価、研究の発展の礎となる優れた書である。本書が広く読まれることを願うとともに、ギッシングの作品が再評価されることを願うものである。